

2016 年度高校生国際協力体験プログラム 実施報告書

○日時：2016 年 7 月 29 日（金）13：00 ～ 2016 年 7 月 31 日（日）15：00

○場所：国立大洲青少年交流の家

○目的：四国 4 県の高中生・引率教員を対象とし、開発途上国の現状や国際協力への理解を深め、地球規模の課題や国際協力への自分自身の関わり方について積極的に考える機会とする。

○参加者：高校生 58 名、引率教員 15 名、JICA 長期研修員 6 名、大学生スタッフ 2 名、講師 1 名、JICA スタッフ 9 名 計 91 名

○プログラム詳細：

☆1 日目：7 月 29 日（金）～知る・体験する～

時間	プログラム名	実施場所
12：30～13：00	受付	ホール
13：00～13：30	開講式・オリエンテーション	
13：30～13：45	高プロの説明	
13：45～14：15	施設オリエンテーション（入所式）	
14：15～14：35	アイスブレイク	
14：35～15：35	学校紹介（1 校 3 分×15 校想定）	
15：35～16：00	ホールから宿泊棟へ移動 ※シーツを受け取り、各部屋へ移動 ※荷物を置いた後、野外炊事場へ移動	本館地下 1 階 シーツ等受渡所
16：00～16：10	野外炊事場へ移動	
16：10～19：00	夕食（野外炊飯・カレー）	野外炊事場
19：00～20：00	JICA スタッフとの交流	ふれあい広場
20：00～22：00	入浴	
22：30	消灯／就寝	

☆2 日目：7 月 30 日（土）～理解する・実践してみる～

時間	プログラム名	実施場所
6：30	起床	
7：00～7：30	朝の集い、清掃活動	
7：30～9：00	朝食	レストラン
9：00～9：20	アイスブレイク	ホール

9 : 20~12 : 00	貿易ゲーム	
12 : 00~13 : 00	昼食	レストラン
13 : 00~13 : 30	協力隊の説明	ホール
13 : 30~17 : 30	☆青年海外協力隊員になってみよう！ (プロジェクト作成)	
17 : 30~18 : 30	夕食	
18 : 30~20 : 30	研修員との交流	第一営火場
20 : 30~22 : 00	入浴	
22:30	消灯／就寝	

☆3日目：7月31日（日）～振り返る～

時間	プログラム名	実施場所
6:30	起床	
7 : 00~7 : 30	朝の集い、清掃活動	
7 : 30~8 : 30	朝食	レストラン
8 : 30~9 : 00	退所準備	
9 : 00~9 : 20	アイスブレイク	ホール
9 : 20~10 : 50	☆青年海外協力隊員になってみよう！ (プロジェクト発表)	
10 : 50~11 : 15	ホールの清掃	
11 : 15~11 : 30	部屋の移動（ホール→視聴覚室）	
11 : 30~12 : 30	昼食	レストラン
12 : 30~13 : 30	☆全体振り返り	視聴覚室
13 : 30~14 : 00	閉会式+アンケート記入	
14 : 00~14 : 30	机・椅子の片付け、写真撮影	
14 : 30~15 : 00	バス待ち、解散（バス出発）	
※休憩はプログラムを見ながら適宜とる。		

【1日目：7月29日（金）】

＜開会式＞

まず始めに、JICA 四国支部の笠原より挨拶。その後、スタッフ1人1人が自己紹介を行い、参加者に期待することを伝えた。最後に担当の内山より参加にあたっての注意点、連絡事項を伝えた。

＜施設オリエンテーション＞

施設スタッフより、ビデオを見ながら20分程度、施設利用時の注意点について説明があった。

＜アイスブレイク①—じゃんけん列車—＞（担当：高知県推進員 杉尾）

初日の初めてのプログラム「学校紹介」に移る前に、参加者の緊張をほぐすため、「じゃんけん列車」のアイスブレイクをした。「じゃんけんゲーム」は音楽が終わるたびに出会った者／グループ同士がじゃんけんをし、敗者が勝者の後ろにくっつき、最後には長い一つの列ができるというゲームで、どんな人でも簡単に参加することができる。そのため、ピリッとしていた会場の雰囲気があつという間に参加者の笑顔と歓声で包まれた。最終勝者は意外にも、高知県立幡多農業高校の先生で、先生のおかげで、幡多農業高校の学生は、学校紹介のトップバッターを務めることとなった。また、準優勝した学生は、二日目のキャンプファイヤーの着火をするという特別な役割をゲットした。

＜学校紹介＞

各学校3分程度で、①学校自慢ベスト1、②学校としての参加目標、の発表を行った。参加校の中には、全校生徒が70数名という山間部の小規模校もあり、「他校の参加者とコミュニケーションを図れるように頑張りたい」との目標を発表していた。

また①、②を含め、学校の特色については、各学校が事前に作成した模造紙1枚を、プログラム期間中、活動部屋の壁に展示し、紹介した。

学校紹介の最後の余った時間で、教員と研修員の自己紹介の時間を設けた。教員は普段学生に見せていない一面（ニックネームや趣味等）を紹介したり、研修員は日本語で一生懸命だったり、場を和ませた。

＜野外炊飯＞

野外炊飯では、研修員が各班に1名ずつ入り、参加者は研修員と協力して調理を行った。この時、引率教員やJICAスタッフは極力サポートに入らないようにし、参加者が積極的に話ができる環境作りを行った。今年度は研修員が6名しかいなかったため、参加者が10名になったグループもあり、研修員と十分に交流できない参加者もいた。また、火の管理については昨年同様、引率教員にお手伝いいただき調理を行った。

今年度のカレーは昨年同様ハラール認証を受けた鶏肉を使い、更にはカレーのルーについても動物性油脂を使用していないベジタリアン用のものを用意した。これにより、イスラム教徒の研修員も参加者と同じ物を食べる事ができた。また、食事の前にはイスラム教徒の研修員からイスラム教の食事について説明してもらい、何気ない食事の中でも、世界の宗教や食文化を感じることができる内容となった。

【2日目：7月30日（土）】

＜アイスブレイク②—共通点探し—（担当：香川県推進員 松本）

○ねらい

共通点や違いを見つけることで1日目よりもさらに互いの知らなかった一面を知る。

生徒・教員・ABE イニシアティブ・スタッフ、全員が参加し、ファシリテーターの質問に合わせて参加者が仲間を見つけるアイスブレイクを行った。

始めの質問は「血液型」。A型が多いと思いきや話し上手でどんな場にもなじみやすい当プログラム向きでもあるO型が多かった。それぞれの血液型の人たちは長所や弱点を聞くと「そうそう」「へえー」という声が自然とあがり場が和んだ。

次の質問は「今の気持ち。わくわく（楽しみ）、ドキドキ（緊張）、びくびく（不安）に分かれる」では半数以上が「ドキドキ」と「ビクビク」に移った。「男子が少ないから不安」「うまくできるか不安」など今の気持ちを勇気を出して素直に伝えることで自分だけじゃないんだと不安がやわらぎ、お互いが助け合って楽しんでいこう、と一体感が生まれた。

＜貿易ゲーム＞（担当：香川県推進員 松本）

○ねらい

- ①「貿易」を中心とした世界経済の基本的な仕組みについて理解する。
- ②自由貿易や経済のグローバル化が引き起こすさまざまな問題に気づく。
- ③物質的に豊かな先進国に住む自分たちの立場、また途上国に住む人の立場や気持ちを考える。
- ④貿易がもたらす問題が自分たちの生活にも関連していることを知る。

高校生のグループ11個、ABE イニシアティブの研修員グループ1個の計12個のグループがそれぞれ「国」を表し、世界経済の仕組みを体感する貿易ゲームを行った。各グループは人数編成や、テーブルの配置などを工夫し、実際の世界の様子を会場全体で表現した。

教員の方には貿易ゲームのルールやファシリテーションをまとめた資料を渡し、学校でも実践して頂けるようにした。

ゲームが始めると同時に開発途上国役のグループは積極的に先進国役のグループへ交渉が始まり、先進国役の人たちは作業ができないほどたくさんの人に囲まれた。先進国との交渉だけでなく、高校生たちは積極的に英語を使って研修員グループにも交渉していたりマーケットでもすぐに諦めずにお問い合わせしたりと、全員がそれぞれ役割を持ってゲームに夢中になっていた。ゲームの途中には道具の一つである折れていた鉛筆をはさみで削って使えるようにした知恵を使ったグループや、国の持ち物を入れていた封筒を製品を作るために必要な紙として使用していた想定外の行動を取った班もあった。また研修員の班は「誰かが盗みにくるかもしれないから」と常に見張り番がいるという日本人では考えられないような動きがみられた。

ゲームの振り返りでは参加者1人1人がゲームを通じて感じたことを漢字一文字で表した。「難」「辛」といったネガティブな表現が多い中、青年海外協力隊が入ったグループは協力隊が来て何をすべきか教えてもらって安心したという「安」や皆で協力してお金を稼げたという「協」といった字を選んだ生

徒もいた。

振り返りの中で開発途上国のグループに不利な状況になっていたという仕組みに思わず感嘆の声をあげたり、ゲーム内だけでなく実際の生活にひもづいていることを伝える場面では改めて途上国に住む人たちの立場や経済の深刻さを再認識している様子だった。

今回の貿易ゲームの一番珍しかったことは、先進国のグループが優勝したものの、最終資金が減ったことだった。その背景を先進国役の生徒に聞くと「先進国の立場として国際協力を行うべきと思って、自分のグループの資金は減っても良いから他の国を援助した。」と、現実世界で先進国に住む私たちが世界が平和になるために大切な心構えを気付かせてくれた。それぞれの生徒が様々な国の立場を体感することで気付いた色々な感情や考えを大切に、世界が抱える問題について捉えてほしい。

<協力隊の説明>（担当：香川県推進員 松本）

〇ねらい

青年海外協力隊に関する疑問に答え、制度について正しく理解する。

青年海外協力隊の概要については事前学習にて伝えられていたので、より具体的な青年海外協力隊のイメージが湧くように、青年海外経験者の今井推進員と上西推進員に青年海外協力隊の裏話をインタビュー形式で聞いて行った。

まずは青年海外協力隊として派遣されるまでの流れの紹介をした。応募するだけでなく様々なハードルがあることが意外だったようで生徒たちはメモをしっかりと取っていた。その後、今井推進員と上西推進員が現地語のあいさつと共に登場し、派遣前訓練の様子、ホームステイや一人暮らしといった住環境、また病気にかかった時の対処法などを紹介した。ホームステイの家族との苦労話や、水の大切さを痛感した話など赤裸々に紹介すると生徒たちは時に顔をしかめたり、笑ったり、口をぽかんと開けたりと表情豊かに聞いていた。

青年海外協力隊の良さや辛かったことも笑って振り返られる逞しさを知ってもらい、より協力隊のイメージが具体化されたのではと思う。

<青年海外協力隊の体験談>（担当：愛媛県推進員 今井）

青年海外協力隊として2008年10月からニジュールへ派遣され、青少年活動として活動された谷本博子さん（愛媛出身）に青年海外協力隊の体験談を発表していただいた。ニジュールの最高気温が60度を超すという風土的な驚きや、木の棒を歯ブラシとして使用しているという文化的な驚きを交えた内容となっており、終始、会場からは感嘆の声が聞こえた。特に、ニジュールの子どもたちが法被を着て愛媛県宇和島市の踊りを一生懸命に踊っている動画を見た参加者からは笑顔が溢れていた。活動についての話で、谷本さんが同僚から経済的な面で頼られたことがあるという話から、そんな時自分だったらどのように対応するか、参加者に投げかける場面もあり、参加者たちは谷本さんの体験に真剣に向き合い、考えながら聞き入っていた。

＜青年海外協力隊になってみよう！プロジェクト作成＞（担当：愛媛県推進員 今井）

○ねらい：日本とは異なる考え方、価値観があることを知り、それらを尊重することの重要性を学ぶとともに、それらに対して自分たちがどのように向き合うのか、活動内容を考える。

谷本さんのファシリテーターのもと、参加者は6人ずつのグループになり、ニジュールを舞台とした青年海外協力隊になってみよう！プロジェクトを作成した。まず、ロールプレイを通して各々がニジュールの村人になって、現地の問題点についての話し合い活動を行った。参加者一人一人が現地の方々の気持ちに迫ったことで、現地の人々の考え方や価値観を尊重し、現地の人々を巻き込みながらそれぞれプロジェクト作成ができていた。また、プロジェクト作成中、それぞれの参加者の持つ特技を活かすと活動の幅が広がる、という気付きを持たせたグループも多く見られた。

＜JICA 研修員との交流＞（担当：徳島県推進員 上西）

生徒代表・研修員代表各1名がトーチと共に入場、点火後、プログラムが開始した。キャンプファイヤーを囲み、各研修員はそれぞれ約10名の生徒に囲まれ、約20分間、自国の文化や家族などを紹介後、生徒からの質問に答えた。参加生徒は研修員が事前に準備した写真や資料に興味津々で、また研修員のユーモア溢れる話に、各グループから笑い声が聞こえていた。時間終了後はグループを交代し、各3名の研修員と交流の時間をもった。その後、参加者全体で「阿波踊り」を踊った。徳島からの参加生徒が代表して他の参加者に指導し、最後はキャンプファイヤーの周りを参加者が全員で踊り、会場は一体となった。

【3日目：7月31日（日）】

＜アイスブレイク③—仲間作り—＞

2日目の「青年海外協力隊になってみよう！プロジェクト作成」を通じて、それぞれのグループ内で、協調性が育まれた。3日目のこのアイスブレイキングでは、プロジェクト発表でより仲間意識を持てるように、グループの仲が更に深まる「ヘリウムリング」を行った。

ヘリウムリングはフラフープを頭上から床まで下げるという単純な作業でしかない。一人でやれば、とても簡単にスムーズにできる作業だが、6人ですると想像外のことが起きて、とても難しい。難しいけれど、一人でするよりも発見や気付きがあってもっと楽しい。達成したときの喜びももっと大きい。チームワークの大切さ、面白さをこのアイスブレイキングを通して感じ、仲間を意識したプロジェクト発表に繋がった様子であった。

＜青年海外協力隊になってみよう！プロジェクト発表＞（担当：愛媛県推進員 今井）

プロジェクト発表は、各グループ発表5分、質疑応答5分という形式で行った。発表の中には、「ニジュールの村の人たちを巻き込んで活動を展開していきたい」、「まずは村人に取材をしてニーズを把握しなければならない」、「プロジェクト終了後も村人たちだけで活動を続けていけるような支援をしていきたい」といった、ニジュールの価値観や考え方を尊重したプロジェクトが多く見られた。また、「現地にあるものを利用していきたい」、「ニジュールは暑いからこそ、ドライフルーツなどの乾燥物を特産品としたい」、「陽射しが厳しいので、ソーラーパネルが有効的だ」というニジュールの風土や特性を生かし

たプロジェクトも見られた。質疑応答の時間には、参加者や教員、研修員、JICA スタッフの中から積極的に手が挙がり、活発的な意見交換ができていた。

<全体振り返り>（担当：徳島県推進員 上西）

プログラム参加前に決めた各高校・各参加者の目標について振り返りを行った。それぞれ、達成度合いとその理由について自分自身と向き合った後、各高校の参加者内で話し合い、発表を行った。自分自身の達成度に関して厳しく向き合っている参加者もいたが、全体的に比較的高い達成度合いであった。学校紹介時に「他校の参加者とコミュニケーション図れるよう頑張りたい」と目標設定した学校の生徒は達成出来たと4人が起立し、堂々と発表していた。この時間では自ら挙手し、発表する参加者も多く、3日間のプログラムを通して参加者の意欲や積極性、また国際協力に関する知識の向上を感じることが出来た。最後に教員、研修員、スタッフからのコメントを発表し、無事に全プログラムを終了した。

【当日の様子】

アイスブレイク①～じゃんけん列車～	学校紹介
	
野外炊飯	野外炊飯
	

アイスブレイク②—共通点探し—



協力隊の説明



協力隊体験談



協力隊になってみよう～プロジェクト作成～



JICA 研修員との交流



JICA 研修員との交流



JICA 研修員との交流



JICA 研修員との交流



アイスブレイク—仲間作り—③



アイスブレイク—仲間作り—③



協力隊になってみよう～プロジェクト発表～



協力隊になってみよう～プロジェクト発表～



全体振り返り



全体写真

